

で、あるから、人々で病人がある時には、持ち帰つて枕元に灯せば、病気がなれるという言い伝えがある。

唐人蹕

二月初旬は土神の祭日であることから、唐人屋敷では二日～三日の二日間、土神堂に供物をささげ、舞台を造営し、水滸伝や三国志などを模した歌舞を披露。笛・銅鑼・喇叭（らっぱ）・片張太鼓なども用いて賑やかに演奏が行われた。

唐人踊の際には見物客も唐人屋敷を訪れた。二日は長崎奉行・長崎代官・御勘定方、三日にはそれ以下の役人たちが見学に赴いた。

文政年間以降になると、唐船貿易衰退の影響を受け、踊りは中止になつた。

唐人の諷訪神事見物
諷訪神事の期間中、御旅所には唐人棧敷が設営され、唐人たちが大勢見物に出かけた。



長崎歴史文化博物館収蔵
祭礼図屏風「左隻部分」

冬至

二月に入ると唐人屋敷では酒宴を催し「冬至（唐人）団子」を作つて親しい人々にふるまう。また、唐人屋敷に出入りする日雇いは「唐船入津」と称して唐船の模型を作り、銅鑼を鳴らしながら持ち廻る。一方、唐通事の家々では「冬至（唐人）団子」を拵

参考文献
原田博二「中国関係の行事」（『新長崎市史』近世編、第七章
第一節「年中行事と祭礼」）
(四)に所収、二〇〇三年）
織田毅「史料紹介」「長崎歳時記(二)(二)」(『長崎学』創刊号
第二号、二〇一七年二〇一八年)

おわりに
このように唐人屋敷を
主な舞台として行われた
日本人と唐人による年中行事
(ひいては国際交流)
は、近世長崎の町において、
生活のあらゆる部分に根付いていた。
唐人屋敷の年中行事の歴史を知ることは、現在の長崎市民の生活や文化を見つめ直し、日本と中国との相互理解を深めることにもつながるものと考えられる。

先述したチヤンメラ吹きは、夜にかけて通事宅へ祝儀に参上した。日雇いやチャンメラ吹きには祝儀として錢を包むのが慣例であった。

え、汁粉にして大通事から奉行所へ献上する。彼らは親類や得意先へ「冬至(唐人)団子」を送るか、汁粉を馳走して冬至を祝

第六回長崎学公開講座 第一部発表要旨

野田和弘

長崎の端午の節句

べていたが、次第に室内に鎧、兜などを飾るようになり、現在のようになつた。

端午の節句とは
端午は初めという意味
端午とは各月の最初の午
(うま)の日のことである
ところが中国の暦では五月
月が午の月なので、五月の

最初の午の日を特に端午の日としていたが、理由について定説はないが、五が重なる五月五日を節日とするようになつた。中国の古い行事では、この日に菖草を取り菖蒲酒を飲み厄災を除き病魔を避け習わしとした。日本にもこの行事が伝えられ、菖蒲や蓬など季りの強い植物に魔除けの力を認め、これを身につけたり屋根に葺いたりした。

鎌倉時代以降になると、「菖蒲」が「尚武」と同じ読みであることなどが、端午の節句は男子の成長を祝う行事となつた。初めは家の前に幟を立て、その下に毛槍や長刀、飾り兜などを並

鯉のぼり

ただし、貧家のものは布製の幟が作れないので、代わりに二〇～三〇枚の紙製の幟を立てるとも書かれている。

揚げられるようになつたのは江戸時代後期からで、関東の風習として始まり全国に広まつた。鯉のぼりの由来は、幟の絵柄に、めでたい絵柄として龍門を登る鯉の絵がよく描かれていたが、いつのまにか幟の先端に、小さな鯉の形をした飾りものをぶら下げるようになり、これが次第に大型化して単独の吹き流しとなり、現在のようになつた。



長崎地方の鯉のぼり

最近では長崎の町でもこの揚げ方はだんだん少なくなってきたが、今でも見ることができる。

ペーロン

ペーロンの起源は中国の

屈原を弔うために始まつたと言われている。屈原は戦国時代の楚の人で、楚の国王懷王に仕えたが、その子襄王から不當な扱いを受けたのでこれを憤り、五月五日に汨羅（ベキラ）

揚げられるようになつたのは江戸時代後期からで、関東の風習として始まり全国に広まつた。鯉のぼりの由来は、幟の絵柄に、めでたい絵柄として龍門を登る鯉の絵がよく描かれていたが、いつのまにか幟の先端に、小さな鯉の形をした飾りものをぶら下げるようになり、これが次第に大型化して単独の吹き流しとなり、現在のようになつた。

川原慶賀筆観劇図『唐館絵巻』
長崎歴史文化博物館蔵

川祭り
端午の節句の行事では、長崎の家や町では川

ペーロン
ペーロンの起源は中国の屈原を弔うために始まつたと言われている。屈原は戦国時代の楚の人で、楚の国王懷王に仕えたが、その子襄王から不當な扱いを受けたのでこれを憤り、五月五日に汨羅（ベキラ）

「長崎歳時記」では、「此日（五月五日）沖手におみて競渡船あり、俗通してはいわんといふ」と書かれている。当時はペーロンとはいわず、ハイロンといつたようだ。

更に「多く海つきの町々また近浦より出る」とあり、船津浦、馬込、小瀬戸、稻佐、大浦、土井首、小ヶ倉などから船が出でていった。一艘毎に五〇人乗り組み、銅鑼、太鼓を打ち鳴らし、早さを競つたと書かれている。更に「市中の貴賤浦々の老若何れも長崎の町は水に恵まれておらず、飲み水の確保は非常に重要な事であつた。そのためにも川祭りは、子供の水難除けと併せて、水に感謝する大切な行事であった。

長崎では井戸のことを「いがわ」と呼んだ。川祭りは井戸の祭りでもあつた。祭りの間それぞれの井戸では井戸浚いが行われた。

長崎では井戸のことを「いがわ」と呼んだ。川祭りは井戸の祭りでもあつた。祭りの間それぞれの井戸では井戸浚いが行われた。

参考文献
野口文龍「長崎歳時記」「長崎県史 史料編第四」昭和四〇年

本木昌造と蠍型電胎法
野田和弘
明治元年（一八六八）長崎製鉄所の頭取に就任した昌造は、製鉄所に活版印刷所の設置を計画し、しかし字体が複雑で金屬活字にする方法は非常に難しかつた。そこで昌造は上海の印刷会社、美華書館のウイリアム・ガントルを招聘した。彼は漢字による聖書の印刷に取り組み、蠍型電胎法による漢字の金屬活字製法を開発していた。

この製法は、彫刻した木製活字を、黒鉛を混ぜた蠍版にプレスして出来

祭りが行われた。
『長崎歳時記』によると各家では、井戸の周りに紙幟を掛け、八大竜王の神名と家名などを書いた角に杉の丸木を立て、銅鑼を鳴らして、木綿の大幟を揚げた。かたわらに水神棚を設け、鏡餅や野菜果物などを供えた。町内の子供達は神名ならびに姓名を記した紙の小幟を持ち、大幟の下に立ち並び、神主を呼びお祈りをしたと記されている。

また各町々では町の四隅に杉の丸木を立て、銅鑼を鳴らして、木綿の大幟を揚げた。かたわらに水神棚を設け、鏡餅や野菜果物などを供えた。町内の子供達は神名ならびに姓名を記した紙の小幟を持ち、大幟の下に立ち並び、神主を呼びお祈りをしたと記されている。

阿蘭陀通詞の本木昌造（一八二四生）が、活版印刷と関わり始めたのは、安政二年（一八五五）西役所内に設立された、洋書を復刻印刷する活字版擡立所の取扱掛に任命された時からである。後に出島内に開設された出島印刷所で、オランダ人のインデルマウスから更なる印刷技術を習得した。



長崎県印刷工業組合、
本木昌造顕彰会提供

た蝋版を、硫酸銅溶液中に浸し、電気メッキするこにより、銅製の鋳型（母型）を作り、鉛製の鋳造活字を作る方法であった。明治二年ガンブルは来日、昌造は唐通事会所跡（現興善町）に製鉄所付属「活版伝習所」を開設し、ガンブルから蝋型電胎法による活字製法を学んだ。翌年昌造は製鉄所を辞め、新町活版所（現興善町）を設立し、铸造活字を製造、販売した。更に東京、京都、大阪に進出し、全国に铸造活字を広めた。

昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。

昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。

昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。



魏之琰の屋敷跡
(福建省福清市東瀚鎮陳庄村)

ところで、之琰の出身地が福建省のどこかについて書かれているのである。西山本町の鉢鹿家の墓地は椿原、「原」と「林」の違いである。この「椿林」から之琰の出身地が魏君のいわれるようになり、この陳庄村と断定できたのである。

田氏自身は、「福清縣とかつての福清縣は、実に広大であることなどから、筆者も之琰の出身地が現在のどの村かななどその特定はほとんど不可能と

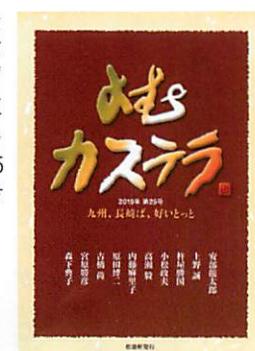
た。昌造は唐通事会所跡（現興善町）に製鉄所付属「活版伝習所」を開設し、ガンブルから蝆型電胎法による活字製法を学んだ。翌年昌造は製鉄所を辞め、新町活版所（現興善町）を設立し、铸造活字を製造、販売した。更に東京、京都、大阪に進出し、全国に铸造活字を広めた。

昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。

昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。

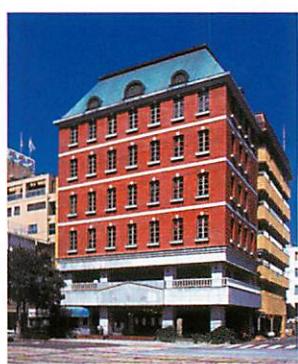
昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。

昌造は明治八年、五十二歳で病没。活版印刷を全国に広め、わずか五年後のことであつたが、その間昌造は活字の大きさを統一し、明朝体の書体を採用しそれぞれ全国共通のもとのとしたこと、また多くの後継者を育てたことで、日本の活版印刷の進展に大きく貢献した。



よむカステラ 25号

松翁軒の創業は、天元年（一六八二）のこと、以和來、「カステラ元祖」としてその伝統を誇っています。松翁軒は、以前からカス



長崎市魚の町三番一九号

法人会員紹介 (株)松翁軒

第六回長崎学公開講座 第二部発表要旨

鉢鹿家のルーツ

原田 博二

鉢鹿家の始祖魏之琰（字は雙、号は爾潛）は、福建省に生まれ、兄魏毓禎とともにに東京（ベトナム）に移住、長崎とベトナムとの貿易で巨財を築いた（之琰の子清左衛門の時に鉢鹿に改姓）。

そこで、福清市郊外の陳庄村を訪ね、魏君の案内でも調査を行つたが、そこは荒れ放題で、とてもかつて豪壮な屋敷があつたなど想像もできなかつた。

ところが村の集会所（魏氏総祠）で「鉢鹿魏氏總譜」を見て驚いた。なんとそこには、毓禎と之琰の墓が長崎のそれも「椿林」にあると書かれているのである。

えます。これは「カステラを通じて長崎を、南蛮・紅毛を、日本文化を、そしておやつを考える」をコンセプトに、田辺聖子氏、妹尾河童氏、安倍龍太郎氏、高橋陸郎氏、西館好子氏など多くの文化人が寄稿し、希望する方々に配布してきました。

えます。これは「カステラを通じて長崎を、南蛮・紅毛を、日本文化を、そしておやつを考える」をコンセプトに、田辺聖子氏、妹尾河童氏、安倍龍太郎氏、高橋陸郎氏、西館好子氏など多くの文化人が寄稿し、希望する方々に配布してきました。